
月の都

かの@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の都

【Nコード】

N1385Q

【作者名】

かの@

【あらすじ】

「長く生きれば汚れるものだ。僕には、花の弱さが汚れずにすむ免罪符のように思える」——永久の命をもてあます吸血鬼ユーシス。「おまえがあいつの元に行くことは許さない。そんなことになるのなら——いっそ、私がおまえを殺そう」——美しく冷たい義兄のリユーク。

教会の手先となって吸血鬼を狩る狩人アーシャシャスールは、二人の間で揺れ動く。吸血鬼と教会。相容れない2つの中で葛藤の末にアーシャの選ぶ道とは。別サイトで連載中のものです。

prologue

嘘だ、とアーシャは叫んでいた。唇は塞がれているから、それは言葉にならず、彼女の体内にとどまった。

ほんの一瞬の油断。物思いにふけりながら歩いていたら、背後の気配に気づくのが遅れたのだった。気づいた時にはもう遅い。体の自由を奪われ、壁に押し付けられていた。その上、こんな屈辱的なことまで。

魔力を含む紅い瞳は、いとも簡単にアーシャの力を奪った。

体がまるで鉛のように重く、そのうえ、唇を塞がれて息が苦しい。いつのまにか口腔に入り込んだ生暖かい感触に翻弄される。体の全ての感覚が、口内に集中しているような錯覚を覚える。軀は一気に火照り、まるで頭の中に靄がかかったようだ。

——駄目だ、やられる——。

生き物としての本能が、うるさく警鐘を鳴らした。男の白い牙が、光を受けてきらりと光る。

男の顔は、街灯の光で逆光になってよく見えない。ただ目映い金の髪と、血の色の瞳が脳裏に刻み付けられる。男の顔が視界から消えると同時に、首筋に鋭い痛みが走った。背筋を悪寒が這い上る。

これは、何だというのだろう。

得体のしれない快感が背筋を突き抜けてぞっとする。それでも痛みは止まない。痛みなのか、快樂なのか、わからない。アーシャは声を出すことすらできずに喘いだ。

「アーシャ……！」

誰かが、遠くでアーシャの名を呼んだような気がした。アーシャ

は必死にその声が誰なのか思い出そうとする。けれど結局、深い闇の淵に引きずり込まれるようにして、アーシャは意識を手放した。

真実をつける意味

「リユーク、おまえはオセロというゲームを知っているか」

「ええ、存じております」

「これはそのゲームのようだと思わないか？この月の都を舞台にした、壮大な、不可逆のオセロゲームだ。一度黒になればもう白へは戻れない。ただ死のみが彼らの尊厳を回復する」

「神から託された、悪魔との戦いではないのですか」

「全能の神が、我々に戦いを託されたりするだろうか？——我々は神に試されているのだとは思わないか」

「私には、理解しかねます」

「残念だ。君もいつか気づく時がくるだろう。これは誰がいつ始めたのかもわからない、太古の昔から続く、神と悪魔のゲームなのだよ。私たちは、踊らされているだけだ。君も私も、教会も国王も、そして吸血鬼もね」

「私も残念です、ジユダ様。先日の審議会によって、貴方の処分が決まりました。——教会からの指令により、貴方を第一級罪人として、処刑いたします」

* * *

月の都、とその街は呼ばれる。

王が住まう城の城下街は、道の代わりに、入り組んだ迷路のように水路が張り巡らされていた。船頭の操るゴンドラーナが活発に行きかい、人々を運ぶ。

しかし、夜になると、賑やかな雰囲気はなりをひそめ、静謐な空気が街を支配する。水路の水面は穏やかにさざめいて、頭上に浮かぶ月を映し、反射した光は石造りの建物の壁に淡い影をゆらすのだ。ここは、さざめく水と月の影の都。

本当の名は、誰も知らない。永い時の流れに忘却の海へとおしやられてしまった。

——その都の、人通りの少ない裏水路。

遠くで、黄昏を伝える鐘の音が鳴る。それ以外には、櫓をこぐ規則的な音が眠たげに響くだけで、あたりは静かだった。

建物の隙間から差し込んだ西日が水面で黄金色に輝き、暗く狭い空間に、一時の光の洪水を生み出していた。

「おや、アーシャ殿ではありませんか」

アーシャが船頭に礼を言いながら船を降りると、目的の扉の前にキースが立っていた。ひよろりとした体躯の男は、どうやら扉から出て来たばかりとみえる。狐のように細い目をさらに細めて、キースが笑った。

アーシャは、その場で回れ右をしたくなった。この男が苦手だ。その細い目の奥で何を考えているのかがいまいわからない。それに、その道化じみた態度も厭わしい。

礼を失しないように無言で会釈すると、さつさと扉に手をかける。

「今日はリユーク殿とは一緒ではないのですか？」

背後から投げかけられた言葉に、アーシャは動きをとめた。

「一人です」

「それは——、いささか危険なのでは？」

「私は狩人です。^{シャースル}そしてここは、その本部。何が危険だというのですか？ 仮に危険だったとしても——、自分の身くらいは自分で守れます」

振り返ってきつく睨みつけると、おやおや、とキースが肩をすくめた。相変わらずの、人を食ったような態度。相手にしても、仕方ない。アーシャは苛立った心を宥めると、一人さっさと扉を開けて中へ足を踏み入れた。

「気を付けて、アーシャ殿。シャスール狩人が常に貴女の味方とは限りませんよ」

キースが微笑みながら、小さく呟いた言葉は、アーシャに届くことなく、宙に浮いて消えた。

* * *

扉の中は、薄汚れた外観からは想像できないほどに整っていた。床には磨かれた白い大理石がしきつめられ、大理石の柱が通路の両脇に規則的に並ぶ。

柱のかたわらで、白いマントを羽織った体格の良い男たちが賑やかに歓談していた。彼らもアーシャやキースと同じ、シャスール狩人たちだ。アーシャが足を踏み入れた途端、その男たちから一斉に、刺すような視線が向けられる。しかし怯むことなく、アーシャは堂々と前を向いた。悪意を向けられる者は、けして隙をみせてはいけないのだと、ここ数ヶ月の経験で学んだ。

「なんでこんなとこに女がいるんだ？子供の遊び場じゃねえぞ」

「女は黙って家の中で震えてりやいいんだよ」

揶揄の声が飛び交い、男達はどっと笑った。最初は戸惑った罵詈雑言も、今はもう慣れっこだ。アーシャは無視して、先を急ぐ。相手を待たせては、失礼になる。

アーシャがわざわざ本部を訪れたのは、教会から一通の封書を受

け取ったからだった。

差出人は、カデル大司教。数日前に聖地の巡礼から返って来たばかりの、教会一、二を争う権力者である。

「大司教様。それは本当ですか」

通路の突き当たりにある狭い一室。アーシャは大司教の口から告げられた言葉に、礼儀も忘れて大声をあげた。アーシャを呼び出した張本人であるカデル大司教は、重々しく頷く。

「そうだ、アーシャ。イグラゼル。信じられないのも無理は無い。しかしこれは、まごうこと無く本当のことだ」

「ですが…！国王が吸血鬼と通じているなどと…国を売ったも同然ではありませんか」

「通じている、などというところではない。国王は奴らに爵位を与えている」

アーシャは絶句した。

とつくに日は落ち、室内には蠟燭の灯が頼りなくゆれている。火影がカデル大司教の顔に、憂いのように濃い影をおとしていた。

カデル大司教は、アーシャが落ち着くまで少し間を置いた。

「国王陛下は、教会を厭うている。だからこそ、教会の敵である吸血鬼たちを味方に引き入れようとしているのだ」

信じられない、信じたくない事実だ。本来庶民を守る義務を背負う貴族たちの中に、吸血鬼が紛れ込んでいるなどと。しかもそれは、ノブレス・オブリージュ 国王自身の意志によるという。

アーシャは、自分の心が怒りに震えるのを感じた。自分たち狩人シャースール

が城下で必死に吸血鬼を追い払っているのを、かれら貴族は笑って見物していたのだろうか。けして手の届かない高みから。

「貴族となると、なかなか手を出せない。かといって、この事実を広めれば、民の多くは絶望してしまうだろう。それゆえに、この事実は秘せられてきた」

カデス司教が、アーシャが部屋に入ってすぐに人払いをしたのも、そのせいなのだろう。

「このことは――、誰が知っているのです？」

「大司教以上は皆知っていることだ。おまえの兄、リュークにも私が伝えた」

アーシャは正直なところ、戸惑っていた。

「そのような秘密を、なぜ私に？ 私はまだ若輩で…司祭の位も賜っておりません」

「おまえは、リュークの妹だから信頼もおける。それに、これから関わってもらう任務に関係があるのだ」

大司教の本音は後者であろう、とアーシャは冷静に考えた。確かにリュークは優秀な狩人^{ハンター}であるし、上司からの信頼も厚い。しかし、彼に比べて、自分が劣っていることは彼女には痛い程よく解っていた。

「それは、その貴族の吸血鬼に関する任務ですか」

「そうだ。おまえには、王宮に入り込んでもらいたい。きたる日に向けて、調査を行って欲しい」

アーシャはぐくりと唾を飲み込んだ。王宮は、庶民のけして入り込めない場所だ。下働きの者でさえ、王宮関係者の紹介を要する。ましてや、国王と対立する教会の者など、向こうが歓迎するはずもない。

カデル大司教はアーシャの動揺すら見透かすように、真つすぐみつめてくる。

彼は20代にして大司教になった生え抜きの狩人^{シャースール}だった。だからだろうか。紺碧の瞳には、人を飲み込むような、有無を言わさぬ圧倒的な力がある。

「できるな？おまえは、両親の仇をとりたいのだろう？」

「——はい」

「復讐は本来許されないことだ。しかし、神は悪魔たる吸血鬼対してのみ、それをお認めになった」

アーシャは頷く。

「おまえには追って指令状を出そう。——神の祝福があらんことを」

カデル司教はそれ以上のことは言わなかった。話は終わったのだ。アーシャは未だに尾を引く動揺を押し隠して静かに一礼すると、その場から退出した。

部屋を出ると、見知った顔が待っていた。そわそわと落ち着かなくしていたが、アーシャを見つけるとぱつと顔をあげ、金の巻き毛を揺らして、嬉しそうに駆け寄ってくる。

「アーシャさん！」

「セシル殿。どうしてここに？」

「ええと、アーシャさんに会いに！」

セシルが思わず、と言ったように即答する。アーシャは戸惑って目の前の上司——セシルをみつめた。

彼は、大きく丸い蜂蜜色の瞳に、生まれつき癖のある渦巻いた金髪という、天使のような愛くるしい容貌の持ち主だ。そのせいか、頬を赤らめてうつむくと、本当にうら若い少女にみえる。

けれど、その肩に光る紋章は間違いなく司祭の証。アーシャよりも階級は1つ上だった。教会の中で、女というだけでアーシャを罵ったりしない、希有な存在でもある。

彼はアーシャの直属の上司ではないが、なぜかアーシャの行く先々で会うことが多い。

「カデル大司教は、巡礼から戻られたんですね。何のお話だったのですか？」

「新しい任務についてです」

「どんな任務ですか？」

「任務について話すのは禁じられています」

教会の掟を解っていないはずがないのに、セシルが残念そうに溜め息をついた。取りつく島がないというのは、このようなことをいうですね…と呟くのがちらりと耳に入ったが、どういう意味なのだろうか。

アーシャはちらりと壁の時計をみた。そろそろ屋敷に戻らねばならない。明日は早朝の見回りの当番が入っている。

「それでは、私はこれで失礼します」

「えっ。待ってください」

セシルが慌てた様子でアーシャの袖を掴んだ。しかし、顔を赤ら

めて、なかなか次の言葉を言わない。首を傾げてアーシャが促すと、もじもじしながらやっと言った。

「あの――、夜道は危ないですから、僕が送ります」

「そんな、セシル殿のように忙しい方に送っていただくわけには参りません」

アーシャはびっくりして断った。

「いえ！僕は今日はもう仕事は終わっていて」

「ほら、部下の方が呼んでいますよ」

遠くから、部下がセシルの名前を呼びながら走ってくる。セシルはそれでもまだ何か言い足りないようだったが、アーシャはそっと袖から彼の手を外した。

「ではまた。兄にもよろしくお伝えください」

「リユークさんならば、アーシャさんの方が会っているでしょう…」

いぶかしげにセシルが言う。アーシャは兄の顔を思い浮かべた。もうどのくらい顔を会わせていないだろう。あの厳しい視線も、冷たい言葉も、今は遠い。

「兄は最近、滅多に屋敷に返ってこないのです」

セシルは、はっとしたように口を噤んだ。伺うような視線に、アーシャは少し微笑んで答える。少し気を使わせてしまったかもしれない。けれど、リユークを知るセシルにだからこそ、このような弱音もらせる。

アーシャが礼をして扉を出るまで、セシルは黙って見送ってくれ

た。

この時、セシルとともに帰っていたならば——アーシャは後に後悔することになる。

口づけのもたらす効果1

悠久の時の中で生きるのは拷問のようだと、ユーシスは思う。永遠の時を願う人間たちは、ただ自分たちが手に入らないからこそ不死に憧れるのだろう。愚かで幸せなことだ。

永遠の中では、毎日はまだ消化していくものにすぎない。代わり映えのない毎日がゆっくりと沈殿していくだけだ。どんよりとした倦怠感は今やすっかり体の隅々まで染み付いていた。

ユーシスはアランに引きずられるようにして、石畳の上を歩いていた。

夜の深い闇の中でも、その端麗な姿は色あせることはない。ややウェーブのかかった豪華な金髪は、発光しているかのようで、紅茶色の瞳は魅惑的に煌めいていた。すらりと長い手足は、貴族らしい洗練された動作を更に優雅に見せる。

しかし、ユーシス自身はそんなことに頓着していない。彼が考えているのは、一刻も早く、この『朝早い』散歩から解放されたい。それだけだ。

「ユーシス、なんでさっきから溜め息ばかりついているんだ」

「アラン、おまえは、なんでそんなにいつも楽しそうなんだ」

ユーシスはもう何度目か解らない欠伸をした。彼は寝起きが悪い。低血圧なのだ。

「逆に聞きたい。おまえはなんでそんなに楽しくなさそうなんだ？これから人間を狩りにいくっていうのにさ」

アランは不思議そうにユーシスを見返した。その瞳は狩りへの期待からか、すでにうつすら紅く輝いている。反対に目立たない鳶色の髪は闇に沈んでみえた。

「僕たちくらいの力があれば、そんなに血を飲まなくても平気なはずだ。わざわざ城下にまで降りて、人間を狩らなくてもいいだろう？」

ユーシスは深い溜め息をつく。

「わかってないな、ユーシス。これは俺たちの遊戲だ」

アランはにやりと笑って手を広げてみせた。芝居がかった調子で続ける。

「俺たちは人間の女を追いつめて、いたぶって楽しむ。あの白い柔い肌に牙をつきたてる時の快感を——おまえは忘れたとでも？」

「わざわざ、城下にまで降りて来てすることじゃない。手近に貴族の令嬢たちがいるじゃないか」

アランはむっとしたように眉をしかめた。

「おまえは何もしなくてもあつちから餌になりに来てくれるようなものだからな。全く、とつかえひつかえしやがって。贅沢なことだ」「贅沢？——面倒な時もあるよ」

ユーシスは自分に言い寄ってくる沢山の娘達の姿を思い浮かべた。彼女達は、確かに可愛い。甘い言葉を囁くとすぐその気になってしまふ愚かさも、愛しいと思える。

しかし、夜の遊戲は、所詮は夢。次の日の朝には醒めてしまふ、

儂いうたかたの快樂だ。

「面倒？全く、それが贅沢だっていうんだよ」

今度はアランが溜め息をつく番だった。

しばらくして、唐突にアランが立ち止まった。ユーシスはあたりを見回す。いつのまにか、城下街の中でも、西側の裕福な家の立ち並ぶ区画に入っていた。

月の都は、東と西で街の様子がだいぶ違う。東側は小さな水路が入り組み、大小様々な建物が雑多なたたずまいを晒している。一方で、西側はます目のような区画に沿った水路と小道が、大規模な邸宅の間を並走していた。

どうやら、今日はこの辺りで狩りを行うらしい。

「ここからは別行動だ」

アランが期待に満ちた様子で、心底嬉しそうに言った。

「わかったよ」

ユーシスは友に向かって当たり障り無く微笑んでみせる。しかし付き合いの長いアランは、かえって警戒したように、ユーシスを睨んだ。

「いいか、ユーシス。おまえもちゃんと狩りを楽しめよ。明日話を聞くからな」

気圧されてユーシスは頷いた。アランはどうしても、友と狩りの楽しみを分かち合いたいらしい。面倒なことだ、とユーシスは心の中でそつと呟く。

「ああ。せいぜい狩りを楽しんできてくれ」

「だから、おまえもやるんだぞ」

念押しするアランをうまくあしらって、ユーシスはひらひらと手を降りながらアランを見送った。

アランの姿が消えると同時に、ユーシスは早速踵を返す。

彼は、最初から狩りをするつもりなどなかった。狩人^{シャスール}にみつかつて面倒なことになる前に、城にさつさと帰りたい。明日アランには、適当な作り話をすればいいだろう、と軽く考えていた。

彼はけして快樂が嫌いなわけではない。ただ、面倒なことがそれを上回るほど嫌いなだけだ。吸血鬼たちが人間を狩ることにどうしてそんなに情熱をそそげるのか、心底理解できない。

吸血鬼はもとも人に比べて欲がないが、ユーシスは特に、執着心というものを持ったことがなかった。

ユーシスは、わざとらしくない優雅な身のこなしで石畳を歩いて行く。夜道はひっそり静まりかえり、彼のブーツの固い足音だけが響き渡る。

微かに家の窓から漏れる光だけが、街の人間たちの存在を示していた。彼らは、夜にはけっして外へ出てこようとはしない。月の都は、昼と夜では表情を変えることを、街の住人ならば皆知っているのだ。それが彼らの生きる智慧。

しかし、今日はどこか様相が異なっているようだった。その証拠

に、ユーシスは遙か向こうに、銀色の光をみつけた。

何だろうと、内心で首を傾げる。少しばかり気になって目を凝らすと、どうやら、それは人間のようなだった。

このような刻限に出歩くとは、一体どうしたというのだろう。少なくとも、狩人^{シャスール}ではないようだ。彼らは皆、目立つ白いマントを羽織っている。

危急の用事があった、その帰りなのか。震えながら、己の幸運を信じて、何事もないことを祈って歩いているのだろうか。

——それにしても、銀色の髪など、珍しい。

ユーシスは目を細めてその後ろ姿をじっとみつめた。街灯の光を映して闇にぼうと浮かび上がる銀は、ふわりと風に靡いて揺れる。その光景は、ごく自然に、遙か昔の懐かしい記憶と繋がった。

口づけのもたらす効果2

あれは、いつだっただろう。初めて人を食らった日だったろうか。彼にもそんな日はあったのだ。

その日、絶望に泣きながら蹲った道ばたに、たまたま銀色の花が咲いていたのだった。群れることもなく、孤独にりんと闇に浮かび上がる汚れないその色に、羨望にも似た気持ちを覚えた。しかし、同時にわけもない怒りも沸き上がった。

そつと血に汚れた手で触れると、銀の花も同じように紅く染まって、不思議と胸がすつとしたのを覚えている。汚れないものなどない。自分はそう示したかったのだらうか。

——どんな人間だろう。

ユースはふと興味がわいた。そんな自分に少しおかしくなる。何かに興味がわくなど、何百年ぶりのことだろう。けれど、何にも興味が抱けない自分に、彼は少し失望してもいたのだ。たまには、夜道の散歩もいいのかもしれない。

彼が少し本気を出せば、その人間に追いつくことなど容易いことだった。銀色の長い髪に、白い上質な絹のドレスを身にまとった、驚いたことに、それはまだ若い娘だった。

「君、こんな時間にどうしたの？」

ユースは無意識に呼びかけていた。そして、我に返って自分の行動に驚く。

ただ後ろから様子をみるだけのつもりだったというのに。わざわざ

ざ面倒事を引き起こすような真似をしてしまった自分に、舌打ちしたくなる。今日は、何かが狂っている。

声に反応した娘は素早く振り返った。碧色の両の瞳には、はっとするような鋭い意志が宿っていた。そこに、祈りなどない。ただ自分を信じる光があるだけだ。

——まるで、冴え渡る刃のようだ。

ユーシスはぼんやりと思った。

「おまえは——」

可愛らしい赤い唇から紡ぎだされた声は、姿に似合わず低い声だ。娘は驚いた表情で後さじる。

「吸血鬼か……！」

柄にもなく興奮したのか、知らぬまに瞳が紅く変化してしまっていた。気づいても、もう遅い。

それでも、ユーシスはさほど慌ててはいなかった。娘一人、どうにかなるだけの力は持っているつもりだ。ただ、このまま叫ばれて狩人でも呼ばれると厄介だった。

「——ごめんね」

ユーシスは素早く娘を抱き寄せると、逃す前にしっかりと腰を掴んだ。澄んだ碧色の瞳が見開かれる。さら、と銀髪が絹糸のように彼女の白い頬の上を滑った。

助けを求めようと開かれた彼女の唇に、ユーシスは反射的に自分の唇を押し付ける。

「ん…っ」

唇は、想像以上にふわりとして柔らかかった。

逃げようとする唇を追いかけて、更に深く浸食する。口の端から、どちらのものともわからない熱い吐息が漏れる。僅かに娘の抵抗が弱くなった。

その隙に、素早く娘の両手を片手でまとめあげて、すぐ脇の壁に押さえつける。娘が慌ててばたつかせる体を、自身の体で圧迫して無理矢理従わせた。

そのまま空いている手でそつと白い首筋に触れる。そこで初めて、びくり、と娘が震えた。

怖がつているのだろうか。ユーシスは愛しい気持ちになる。獲物がなす術もなく怯えているのを見るのは、愛しい。

——食べたい。

愛しさとともに、不意に沸き上がったのは、野生の衝動だった。

飢えの感覚を思い出すのは久しぶりだ。何百年と眠っていた凶暴な本能が、ゆつくりと解き放たれるのを感じる。体の奥がかつと熱くなり、そんな自分に戸惑いつつも、どうしようもない衝動に突き動かされる。

この滑らかな首筋に、自分の牙をつきたてたなら、どんな味がするだろうか。一度想像すると、もう我慢はならなかった。

娘の膝から力が抜けて崩れ落ちそうになるのをしっかりと支える。そして唇をいったん離すと、あとは一気にその細く折れそうな首筋に噛み付いた。

闇の淵で見失うもの1

長い間、アーシャは闇の中にいた。世界の果てがあるのなら、こんな場所かもしれない。すべての端、すべてが終わり、無に帰る場所。自分すら見えない闇は、圧倒的な力で己の無力さを思い知らせる。

何も見えない。何も感じない。ただ、真っ黒い世界が、あるだけ。そこに自分が存在するという証は何もない。

アーシャは恐ろしかった。

——自分は誰だろう？今、自分だと思っているものは、本当に存在するのだろうか？だって、何も、見えない。自分の腕すら。

意識すら闇に飲み込まれそうになる。焦って暗闇を駆け出す。いや、駆け出そうとする。でも、自分が走っているのかすら解らない。何の感覚もない。

闇に、のみこまれる。無になる。

——誰か、助けて！

アーシャは、絶えきれずに必死になって叫んでいた。

すると、宥めるように、ふわりと温かなぬくもりが頭を撫でた。それは、限りなく優しく、アーシャを包み込む。

この温かさを、知っている。アーシャは自然と安堵していた。懐かしい甘酸っぱい気持ちが沸き上がって、ゆっくりと恐怖に凍えた心がほどけていく。

闇はいつのまにか消えていた。代わりに白い柔らかな光がアーシ

ヤを包んでいった。

目覚める時には、いつのまにかその心地よいぬくもりは消えていた。名残惜しく残念に思いながら半身を起こすと、ベッドの傍には人影があった。

「兄さま…」

そこは、見慣れたアーシャの自室だった。今までの悪夢が嘘のように、何の変化もない、いつも通りの朝にみえる。ただ1つ違うのは。

「起きたのか」

この場にただ1つそぐわぬ長身の青年は、振り返ると、射抜くように厳しい目つきでアーシャを見下ろした。

兄のその冷然とした蒼い瞳に、アーシャは背筋を緊張させる。

「私は昨日、あれから一体どうなったのですか？」

「覚えてないのか？おまえは、吸血鬼に襲われているところを発見されて、ここに運ばれた」

簡潔に、極めて事務的に素っ気なく兄——リユークが答える。その眼差しがいつそう厳しくなった。アーシャは段々と自分の身に何が起こったかを思い出す。本部でカデル大司教の話を聞いた帰り、夜道で吸血鬼に——襲われたのだ。

「なぜ、一人で行った？あれほど、本部へは一人で行くなど行っただろう」

容赦ない追及に、アーシャは目をそらさずにはいられない。

「私はまだまだ兄さまには力が及びません。それは重々承知です。けれど、せめて、兄さまに迷惑はかけたくないと思つて…」

屋敷に滅多に帰つてこないとはいえ、リユークへの連絡手段はいくらでもあつた。それでもリユークに黙つて本部に行ったのは、忙しい彼の時間をわざわざ割いてもらうのが申し訳なかつたからだ。妹の世話にかからずらつている暇は、彼にはない。

「それで一人で本部に行つて、帰りに吸血鬼に噛み付かれたと？どこが迷惑をかけてないんだ？」

リユークは苛立たしげに吐き捨てる。アーシャは肩をびくりと震わせた。

「申し訳ありません…」

情けなさに視界が滲みそうになった。慌てて瞬きしてごまかす。泣いたら駄目だ。泣いてしまえば、張りつめた心が崩れてしまいそうだった。それに、もう昔の泣き虫の自分とは決別したのだから。

「首を見せてみる」

アーシャは慌てて、髪の毛をかきあげた。リユークの細く長い指が、そつと首筋の跡をなぞる。その表情は、アーシャからはよく見えない。

「こんなに噛み付かせて、おまえは抵抗すらまともにできなかった

のだろう?」

ただ、その声だけが、押さえつけた怒りをはらんでいた。
アーシャは昨日の記憶を思い返して、返事に窮する。抵抗しようとしたのだ。けれど、不思議な感覚に、気持ち良いような、痛いような——力を奪われてしまった。けれど、そんなことをリユークに言えるはずもない。

「あの時、私を助けてくれたのは、兄さまなのですか?」

意識を失う前、確かに誰かの声を聞いたのだ。アーシャを呼んでいた。

リユークは黙って何も答えない。それは肯定のようでもあるし、否定のようでもある。

「……おまえは吸血鬼に噛み付かれたのは初めてだ。だから、教会の掟はわかっているな?」

リユークは口を開くと、代わりに別のことを言った。

「——はい」

「いいだろう。これから三日、おまえはこの部屋から出られない」
「はい」

アーシャは不安を押し隠して頷いた。

吸血鬼の血に免疫がない者は、吸血鬼の誘いに抗えない。本人が望まなくとも、夜になって血の拘束が強まると、自ら吸血鬼の元へ身を投げ出してしまふという。

だから教会は、吸血鬼の血の拘束が有効な三日間は、血を吸われた者を監視する義務を負う。

監視には狩人^{シャスール}がつき、血の拘束に飲み込まれるようであれば、縛ってでもつなぎ止めることになっている。

「私のことを見張ってくれる方は誰なのですか…？」

血の拘束に囚われれば理性を失い、暴れるという。見張りの狩人^{シャスール}——守りの騎士と呼ばれるが——に散々な迷惑をかけてしまうことは必至だった。

「守りの騎士は私がつとめる」

秀麗な眉目をひそめて、リユークが言った。

アーシャはすぐに聞いたことを後悔する。アーシャが倒れたなら、その騎士役を務めるのは、兄のリユークしかないではないか。少し考えれば解ることだ。

リユークは優秀な狩人^{シャスール}だ。三日間も彼がアーシャに拘束されるのは、教会にとっても大きな痛手だろう。彼も本意ではないに違いない。

「ありがとうございます」

申し訳なさに潰れそうになりながら、アーシャはやっとそれだけ言った。

「では日没になったら訪れる」

素っ気ない口調は相変わらずで、ちらりと向けられた冷たい氷のような瞳が、アーシャに役立たずと告げているような気がした。

それ以上の言葉を拒絶するような、広い背中を見送る。完全にその姿が消えてから、アーシャは、やっと肩から力を抜き、ほつと溜

め息をついた。

闇の淵で見失うもの2

昔は仲のいい兄妹だった。

兄は真面目な性格だったから、時々厳格なところもあったし、怒られたりもした。

けれど、その近寄り難い美貌で誤解されがちな彼が、本当は誰よりも優しいとアーシャは知っていた。

氷のような美貌が、溶けるようにふと微笑むのを見られるのはアーシャだけの特権だった。

しかし、いつからだろうか。

おそらく両親が亡くなった頃から、彼は変わった。アーシャを避けるようになり、時たま見せてくれた微笑みも消えた。

反対にのめりこむように教会の仕事に打ち込んだ。たまに話すときには、邪魔なものを見るような目でアーシャを見た。

それでも、アーシャには兄を恨む気など少しもない。両親の亡くなったあと、血のつながらない妹を、一人で養ってくれたのは兄だ。それだけで、十分すぎるほどだった。それに、好きだった兄のことを、すぐに嫌いになれるわけもない。

ただ、自分が大好きな兄に、迷惑しかかけていないという事実だけが、哀しい。

* * *

日は月に追われるようにして地に落ち、長い夜が始まろうとしていた。

アーシャはベッドの上で横になっていた。日が落ちてから、胸の奥がざわざわとして落ち着かない。

自分が自分でないような、確かにどこかが変質してしまったよう

な感覚は、アーシャをたまらなく不安にさせた。

目をつむれば、昨日の様子が閃光のように瞬に映った。

抱き寄せられ、触れ合ったどこか冷たい軀。

そう、彼の軀は不思議なくらいに冷たかった。吸血鬼は人間ではないからだろうか。

そして、闇の中で発光しているかのような目映い黄金色の髪が視界を横切る。紅い瞳がアーシャを捉え――。

はっとして目を開ける。知らぬ間に、額に汗が浮かんでいた。どくどくと、激しく心臓が波打っている。喉が異様に乾いていた。

――アーシャ。おいで。

不意に頭の中で、はつきりと声が響いた。甘い、心地よい声には、ずっと昔から知っているような安心感があった。『呼ばれている』。

アーシャはふらりと起き上がった。どこか意識が浮ついて定まらない。雲の上を歩いているみたいだ。

とにかく、行かなくては、と心が軀を急かす。行かなくてはならないのだ。

追い立てられるようにして、一歩、また一歩と踏み出す。

「アーシャ。目を覚ませ」

けれど、行くことは敵わなかった。

目の前に大きな影が立ちふさがったのだ。のろのろと顔を上げると、冷たく蒼い瞳に射抜かれる。

「兄さま…？」

「おまえは、どうしてそう簡単に引きずられるんだ」

はあ、と深い溜め息に、アーシャの胸がちくりと痛んだ。

失望、怒り、苛立ち。他の誰に向けられるよりも、兄から向けられるその感情が、一番こたえる。

そして同時に、再びあの声が聞こえだす。アーシャを呼んでいる。アーシャを必要としている、声。

アーシャの中のもう一人の自分が囁いた。

ここにいたって、兄さまに迷惑をかけるだけ。本当はわかっていたはず。

剣を持つて狩人になつたところで、兄さまには敵わない。優秀な兄さまの手助けになんてなれやしない。

何より——自分は本当は必要とされてないのだ。誰にも。

「兄さま、行かせて…」

アーシャは震える声で訴えた。

リユークがアーシャを助けようとするのは、それが彼の義務だからだ。彼は教会の命令には限りなく忠実で、自らの私情を挟むことをよしとしない。

けれど、本当はアーシャを誰よりも邪魔に思っているはずだった。もう、いいではないか。解放しなくてはいけない。真面目な彼は、責任感も人一倍だから、アーシャを無責任に放り出せないのだ。だったら、アーシャの方から言わなくてはいけない。

「兄さま、私を行かせてください…」

「駄目だ」

荒々しく、痛い程に肩を掴まれて、ベッドへと引きずり戻された。突き飛ばされ、どさりと軀が叩きつけられる。背骨が軋む音がした。無様にもがきながら、それでも起き上がろうとすると、覆いかぶさるようにして、リユークがアーシャの手足を押さえつけた。

「私は、兄さまに迷惑をかけるばかりです、だから…」

いつのまにか、頬を温かいものが伝っていた。止めようとしても止まらない。

隠そうと顔を背けようとしても、ぐい、と顎を掴まれる。全てを断罪する瞳から、逃れられずにアーシャは縮こまることしかできない。

「だから？私を置いてあの吸血鬼の元へ行くというのか？」

リユークの声は、アーシャをはっとさせる程に、苛立たしげだった。

「おまえは、どこまでも自分勝手だな」

剣を握るには不似合いなほど、細く長い指が、アーシャの頬を乱暴にぬぐった。闇の中で、月光を映してリユークの蒼い瞳だけが光っている。

息苦しいほどに、リユークの熱を身近に感じて、アーシャは戸惑った。

間近で見る彼は綺麗だった。

すつと通った鼻梁と尖った顎はどこか繊細で、額に落ちかかった黒髪の奥に、蒼穹の瞳が二つ、自分をみつめている。端正な顔立ち、怒気をはらむと迫力が増して、いっそう美しかった。

「私は…」

「おまえがあいつの元に行くことは許さない。そんなことになるのなら——いっそ、私がおまえを殺そう」

アーシャが何かいいかける前に、遮るようにリユークが言った。眉をしかめて、鋭く睨みつけられる。頬を辿る指が段々と下降して、首筋をつう、となぞった。

彼の視線で、軀が凍ってしまったように動けない。でも、このまま氷付けになってもいいかもしれない、そう思える。

氷付けになれば、きっと何も感じないままでいられる。

殺すと言われても、全く恐怖は湧いてこなかった。ただ、彼の指先が言葉とは反対に、壊れ物に触れるかのように優しいのが不思議だった。

闇の淵で見失うもの3

——アーシャ。

不意に、どくり、と全身の血が波打つ。軀の温度が一気に上昇する。どうしようもない衝動が背筋を突き抜けて、再び、アーシャの頭の中の声が大きくなった。

それは、耳を通さず直接脳に働きかけてくる。振り払ってもなお、しつこく、しつこく絡み付いてくる。

——君のいるべき場所は、そこじゃないだろう。

次の瞬間、アーシャは力いっぱい身を擦っていた。いきなりの抵抗に拘束が緩んだすきに、纏わりつく腕を振り払い、リュークの下から抜け出そうとする。

半身を起こしたところで、すぐにリュークは最初の驚きから醒めたようだった。再び捉えようとする彼ともみ合って、とりあえず手当たり次第にひっかいた。それでもリュークは全く怯まず、圧倒的な力にアーシャは再び押さえ込まれそうになる。

無意識に左手がベッドサイドをまさぐり、そこに置いてあった水差しを掴んでいた。

「アーシャ！」

目の前のリュークの慌てた声が、なぜか遠くで聞こえた。考える暇もなく、思いきり、左手の水差しをリュークの頭に振り下ろす。がしゃん、と大きな音がして、白い陶器は粉々に飛び散った。まるで時間の流れが突然遅くなったかのように、白い破片はゆっくり

と散らばって行く。同時に紅い色が視界に散乱する。
鉄臭い匂いが鼻をついた。

「あ……」

アーシャはその生々しい匂いに動きをとめた。まるで糸の切れた操り人形のように、身体からずりりと力が抜ける。

頭の中が、光がはじけたように真っ白になった。そして次に、怒濤のように、過去の記憶が一気に押し寄せた。黒と白と、鮮やかな紅に色づいた映像の渦に、ちっぽけな自分が飲み込まれる。

目の前で飛び散った紅。何をすることもできず、隠れて泣くことしかできなかった、幼い日の自分。

震えてまともに動けないアーシャを無理矢理ベッドの下に押し込んでくれたのは、優しい母だった。最後に頭を撫でたのは、誰よりも強いはずの父だった。いいかい、私が迎えにくるまで、ここできっとしてるんだよ。

でも、ならば、目の前で動かない白い腕は、一体誰の――？

「アーシャ！」

引き戻すように強く抱きしめられて、はっと我に返る。

――今、自分は何を？

耳元で、大丈夫だ、と。優しく宥めるような声がした。

遅れて、自分がかたがたと震えているのに気づく。無音だった世界に、荒い自分の息づかいが戻ってくる。

「兄さま……？」

縋りつくようにして、リユークの白い長衣を握りしめた。力をこめすぎて、指先が白くなる。

「アーシャ、落ち着け」

「母様と父様が…わた、私は何もできなかった…私のせいで二人は…」

自分でも何を言っているのかわからない。ただ、どうしようもない焦りと、そして罪悪感が口をついてでた。

「私が、殺した」

ぼろりとその言葉がこぼれて、愕然とした。自分の言ったはずの言葉なのに、耳障りな金属音を聞いたかのように、鳥肌が立つ。

「そう、わ、わたしが、」

その先を封じるように、そつと手で口が塞がれる。

「何度も言ってるだろう。それは、おまえのせいじゃない」

大丈夫だ、と。

耳元の低く掠れた声が、不思議なほど心に染み渡った。

頭に心地よい重みが加わって、頭を撫でられているのだと気づく。それは、少しばかり懐かしい感触で、絶対の庇護が与えられていた幸せな時代に戻ったかのように、アーシャを錯覚させる。

「安心しろ。私がいる」

その一言で、強ばっていた全身から、徐々に力が抜けていった。

何かに赦されたような気持ちになって、心を締め付けていた罪悪感がふわりと溶けた。

安堵すると、視界はみるみるぼやけて、何か温かいものが溢れるように頬を伝う。己の身を切って絞り出すような涙ではなく、心の緩んだ隙間からつい哀しみの残骸を押し出してしまった、そんな涙だった。

生理現象のままに、しゃくりあげると、温かい手が背中を優しくさすった。

労るようにゆっくりりと、まるでアーシャの涙を誘って、膿みを全部吐き出させてしまうかのように。

アーシャを追い立てる頭の中の声は、いつのまにか消えていた。

* * *

どれほどそうしていただろうか。

真綿のような温かさに包まれて、アーシャは世界から自分を守るように、小さく縮こまっていた。

瞼の裏がうつすら赤くなって、目をゆっくりと開ければ、窓から朝日が差し込んでいた。眩しさに目を細めつつ、そっとリユークの胸を押すと、するりと解放される。

「兄さま、怪我が…」

リユークの染み一つないまっさらな白い袖に、紅い血が滲んでいた。あの時、アーシャが水差しを振り下ろした時、彼は咄嗟に腕で頭を庇ったのだ。この傷をつけたのは紛れもなく自分であることに思い当たって、アーシャの顔から血の気が引いていく。

「触るな」

固い声に、伸ばしかけていた手をひっこめる。恐る恐る顔をあげると、リユークは微かに眉を寄せて、目線を逸らした。

自分に触れられるのは許せないのだろう、と思った。アーシャがつけた傷だ。アーシャに手当する機会が与えられなくて、当然だ。また涙が溢れそうになって、慌てて瞬く。

「たいしたことはない」

俯いて黙っていると、すぐにリユークがすつと離れた。先ほどまで密着していたのが嘘みたい、いつもの距離が二人を隔てる。決して遠くはないけれども、けして縮まることもない、絶対の壁。

それが、リユークからの相変わらざる拒絶を示していて、アーシヤは自分のおめでたさを笑ってやりたくなつた。もしかしたら昔の兄に戻ってくれたのかもしれないなんて、そんなに都合の良いすぎることをどうしてちょっとでも期待してしまったのだろう。

シーツの上には、アーシャとリユークの関係のように、もう二度と元に戻ることはない、割れた陶器の破片が散らばっていた。アーシヤが片付けようとするのを制して、リユークがそれを拾っていく。なす術もなく、ただ見ているしかできない自分がもどかしい。いつもそうだ。アーシヤは何もできない。させて貰えない。

嫌われているのなら、せめて役に立つと認めて欲しいのに、そのやる気はリユークの前では空回りするばかり。

誰の役にも立てないならば、自分はここにいる資格なんてないのに――。

「手をみせてみる」

おとなしく手を差し出すと、リユークは指先に少し切り傷があるのを確かめて、ますます眉間に皺を寄せた。アーシヤは縮こまって、彼が何を言いだすのかを待つ。

「あとで、薬を届けさせる。それで消毒しておけ」

何の感情もこもらない声が、降って来た。アーシャは頷いて、ごめんなさい、と小さな声で呟いた。

鳥籠の中の鳥、あるいは1

「やられた」

ユーシスは軽く舌打ちすると、重い身体をなんとか起こした。身体に力を入れた瞬間、胸の傷がずくり、と主張し、眉をしかめる。

「逃げられた…あと少しだったのに」

知らず力の入った手の中で、くしゃりとシーツが皺になった。

「ユーシス様。まだ動かれてはいけません。傷にさわります」

ユーシスを押しとどめようと、傍らに控えていた召使いがさりげなく動く。空気を揺らしもしない、訓練された者特有の、流れるような動作だった。

「ああ、ルイスか。もう大丈夫だ、たとえ銀の刃で受けた傷とはいえ——、僕も一応夜の貴族だからね」

ユーシスは苦笑いして、胸をさする。剥き出しになった上半身には包帯が巻かれていた。白いガーゼには未だに血が滲んでいるが、それでもその傷口は当初よりだいぶ小さくなっていることだろう。

ユーシスが、屋敷に戻ってきたのは一昨日の晩のこと。相変わらず人気のない屋敷で、彼の帰りを忠実に待っていたのは、この召使いの青年一人だった。彼はユーシスの傷をみつけると、普段の無表情を崩し、少しばかり眉をひそめて、すぐにユーシスをベッドへ追い立てた。それからずっと、ユーシスはベッドの外へ出ていない。

ユーシスの包帯をほどき、傷の具合を確かめている間、召使いの

青年は無言だった。

彼に黙られても、ユーシスは特に気にしない。彼はけして無口というわけではないが、あまり余計なことは喋らないのだ。二人の間の沈黙は圧迫するような重苦しいものではなくて、あくまでただ風いだ湖面のように静かなだけだ。

そんな時、彼が何を考えているのかはさっぱりわからなかった。そして、興味もない。

「ユーシスさま、私はルイスではありません」

沈黙を破り、まるで今日の天気を告げるかのような感情の籠らない声で、青年が文句をつけた。どうやら先ほどの沈黙は、ユーシスに訂正の機会を与えるためのものだったらしい。

「あれ、そうだったっけ？ルイスは君の父親だった？えーと、ということは…」

「ルイスは祖父で、父はゲイン。私はジェスです」

そこで初めて、青年は若干呆れたような表情になる。

「ああ、そうそう。もちろん君はジェスだ。忘れてないよ」

ユーシスは笑ってさりとこまかした。

ジェスの一族、フェデウス家は、代々ユーシスに仕えている。今はジェスの代であり、彼はユーシスの殆ど唯一といっていい召使いだ。しかし困ったことに、彼の一族は皆同じような顔をしている。それに加え、まるでそれが決まり事のように、常に無表情だった。

だからユーシスはいつも、隣にいる召使いが一体どのフェデウスだったか、解らなくなる。時々、ジェスを通して、代々のフェデウスに見られているような、そんな錯覚に陥ることがある。彼の意志

は今までのフェデウスたちの総意であるかのような。それくらい、彼らの一族はよく似ていた。

もつとも、滑らかな浅黒い肌や、黒曜石のような瞳と濡れ羽色の髪という取り合わせは、この都には珍しいものだ。背が高く、落着いた表情と口調から、老成してみえるが、よくよく見れば、彼には若干まだ少年のあどけなさが残っていた。

「それより、逃してしまった」

「貴方を傷つけた娘ですか？」

ジェスは素早く言葉を返しながらも、手際よくユーシスの包帯を換えていく。

彼はとてもよくできた召使いだ。主人が何か言う前に、全ての準備を整えている。ユーシスはおとなしくされるがままになっていればよかった。

「いや、ちよつと違うな。僕に切りかかってきたのは、娘を助けに来た狩人の方だ」
シャスール

ジェスには、殆ど何も事情を説明していないといってよかった。彼も詳しい説明を求めないものだから、珍しい銀髪の娘に会った、としか言っていない。

「ああ、なるほど。私はてつきり——。ユーシス様もうお年ですから」

ジェスが若干哀れみの混じった視線を向けてきたので、ユーシスは無然とした。

「酷いなあ。せいぜい1000年くらいだろう。娘にやられる程体

力は衰えていないつもりなんだけど。それにしても、狩人^{シャスール}にやられるのは久しぶりだよ。かなりのやり手だろうなあ、彼は」

実際、危なかったのだ。なんとか逃げおおせたのも、相手が逆上していて冷静ではなかったおかげだった。それでも、怒りのこもった最初の一閃は避けきれなかった。

「娘を逃すのもあたりまえです。こんな大けがをされては――、貴方の力も相当弱まってしまいます」

ジェスは新しい包帯をきつく巻いていく。ユーシスは思わず呻いた。手加減してくれ、と泣き言を言っても、ジェスは容赦する気はないようだ。

相手にしてくれないジェスにそれ以上文句をいうことを諦めて、ユーシスはぶつぶつとぼやいた。

「一日目で失敗したとなると、もう望みは薄いなあ。明日明後日は血の拘束が弱まっていくだけだし――」

いったんはその場から退散したものの、今日も娘を取り逃がすとは全く予想していなかった。

繋がった血の鎖を辿って呼びかけてみたものの、強烈に押し返される感覚――おそらく、結界^{シャスール}だろう――と、何か神聖な気配を感じた。昨日の手強かった狩人が、そのまま守りの騎士になったのかもしれない。

勝負事に対して、あまり熱くなることもないユーシスだが、なんとなく面白くない気分だ。

「よろしいではありませんか。逃しても」

ジェスにさらりと言われて、ユーシスは目を瞬かせた。
意外だった。ジェスのように献身的に仕える立場の者ほど、主人の夜の貴族としての誇りが傷つくのに敏感だと知っていたからだ。特に、矜持が高いのは吸血鬼の基本属性のようなもの。

「血の免疫を身につけた者は殺さねばならないのが厄介ではありませんが、お怪我さえ治ればユーシス様には簡単なことでしょう」

「あ、ああ… そうだね」

淡々とした言葉に、気圧されたようにユーシスは頷く。確かにその通りだった。

自分は何を——固執していたのだろう。

血の免疫を得た者は、吸血鬼にとっては脅威になり得る。だからこそ、免疫者を生み出した吸血鬼には、その者を殺す義務が課せられる。

今まで、ユーシスの血に対抗して免疫を得た者は誰一人としていなかった。だからといって、そんなつまらないことに誇りを感じていたわけではないはずなのだが。

ただ言うならば、わざわざ免疫者を探し出して殺すのが面倒だということくらい。

「アーシャ、という名前だった」

駆けつけた狩人^{シャスール}が呼んでいた名だ。

ジェスが少し驚いたように目を見張る。

「珍しいですね、ユーシス様が名前を覚えているなんて」

「君もたいがい失礼だね」

「本当のことでしょう」

「ジェス——、僕が悪かったよ。今度は君の名は間違えない」

「それはそれは。期待しておきましょう」

コーシスが愛想良い笑みを向けても、ジェスは相変わらず辛辣な言葉で返す。

「アーシャ、か…」

舌の上でその名を転がしてみる。凜とした響きは、彼女の銀色の髪と、鋭い視線にぴったりだと思った。あの銀色の髪は、少し、殺すには勿体ない。

風が戯れにふわりと頬をくすぐる。窓の外に目をやると、すっかり空が白んでいた。——そろそろ寝る時間だった。

鳥籠の中の鳥、あるいは2

四日目の朝。

アーシャは扉の前で呆然としていた。

もう一度、真鍮の取手を握って、押してみる。しかし、そんなアーシャを嘲笑うかのように、櫺の木で作られた頑丈な扉はびくともしない。開かないのだ。

何故かわからないが、扉が開かない。戸惑いながら、薄々と悟ったのは、どうやら閉じ込められたらしい、ということだった。

扉を叩いたり、声を張り上げて召使いを呼んでみても、全く反応が返ってこない。懸念は確信に変わった。

そして同時に、十中八九、これは兄の意志だということも解った。両親がなくなってからずっと、このランフォール家の屋敷の主人はリユーク一人だ。召使いたちは皆リユークに忠実だし、彼の命令となれば、平気でアーシャなど無視できるだろう。所詮、アーシャはこの家の者ではない。

途方に暮れて俯くと、見慣れない鮮やかな董色の色彩に目が沁みた。その董色の生地の裾をそっとつまんでみる。手触りが滑らかで、今にも指先から逃れていってしまいそうだ。胸元にはたつぷりと繊細なレースがあしらわれた、仕立ての良い董色のドレス。

兄が買って来たものだろうが、自分には分不相応な気がして、アーシャは借り物を着ているように落ち着かなかった。いつもの素っ気ない白いドレスの方が、自分の身の丈にあっている。

先ほどまで、鏡の前でぐずぐずしていたのも、ドレスのせいだ。朝起きてみると、クローゼットの中には、いつのまにか何着かの新しいドレスが用意されていた。貴族のドレスにも見劣りしない、最新の流行のものばかり。代わりにアーシャの愛用していた素っ気ない白いドレスはなくなっていた。

仕方なく、そのドレスの中でも、まだシンプルな方だった董色のドレスに恐る恐る身を包み、ついでにうっとおしい髪をまとめあげた。

アーシャは自分の悪目立ちする銀色の髪があまり好きではない。リユークと同じ黒髪だったなら、どんなによかっただろうと思う。少なくとも、見た目だけはランフォール家の一員でいられた。

鏡の中の自分は酷い顔をしていた。目の下にくまがある上、ここ三日で少しやつれたのか、少し顎のあたりがほっそりしている。

あれから三日間、アーシャは初日のように泣くことはなかったものの、何度も暴れて部屋を出ようとしてはリユークに止められることが続いた。

今から思えば、吸血鬼の元へ泣いて行かせてくれと言っていたことが信じられない。吸血鬼に血を吸われてから、おそらく無意識下で血の拘束に囚われていたのだろう。

吸血鬼は、アーシャの両親の仇だ。最も憎むべき相手だ。例えこの世界から自分の帰る場所がなくなってしまったとしても、吸血鬼の元だけは行くことはないだろう。

アーシャは、血の拘束に安々と負けそうになった己の弱さに改めて辟易し、リユークが自分を嫌うのも無理はないと重い溜め息をついた。

己の弱さの結果、この三日間というものの、アーシャは夜は殆ど寝られず、昼夜逆転の生活を送った。もちろん、リユークも巻き添えにして。彼に、さんざん迷惑をかけてしまった。

それでも、扉を開けようとするまでは、確かに気持ちは明るかった。なんとか三日絶え抜いたのだ。もうこれで、何の心配もないはずだった。

なのに、アーシャは今、途方にくれている。

ここ数日のリユークの様子を思い返してみた。

両親が亡くなってから、こんなに長くリユークと一緒にいたことは初めてだった。昼間は相変わらずどこかへ行っているようで、姿を見ることは敵わない。しかし、毎夜決まった時刻になると、彼は必ずこの櫥の扉をあけて現れた。エクソシストの正装である白い長衣を、いつものように隙がなくきっちり身に纏って。

その立ち姿は、妹ながらも惚れ惚れする程に美しく、神に仕える者としての神聖さと、汚れを赦さない潔癖さがあった。

暴れ疲れてリユークの腕の中でまどろむことはあっても、彼の寝顔をみることはついぞなかった。アーシャが目を開けた時はいつも、その蒼い瞳がすぐ間近にあって、じつとアーシャを見つめていた。ただ透明で底がなく、初日のような感情の揺らぎはそのどこにも見いだせなかった。

「やはりおまえは、^{シャスール}狩人になるべきではなかった」

リユークは何度かそう呟いた。ただ、その声はとても小さく、アーシャに向かって言っているというよりは、単なる独り言のように聞こえた。それでも、アーシャはその言葉を聞く度に、自分を否定されている気がして唇を噛んだ。

嗚呼、とアーシャは思い当たる。リユークが自分を閉じ込めたのは、^{シャスール}狩人をやめさせるためかもしれない、と。もともと、彼はアー^{シャスール}シャが狩人になることに反対だったのだから。

結局その日は室内から一歩も出られないまま一日を過ごした。夕方頃、屋敷内が少し慌ただしくなったのが、雰囲気で解った。主人が帰ってくると、屋敷は途端に活気と緊張感を取り戻す。リユークは今日もきちんと^{シャスール}狩人の仕事に行ってきたようだ。彼が仕事を休む姿を、アーシャは見たことがない。

しかし、彼は結局一度も部屋に顔を出さず、この状況について何の説明もないままだった。

翌日になると、アーシャはいよいよ焦っていた。リユークが自分のことをどのように教会に説明しているのか解らない。

教会の仕事を無断で一週間休むと免職になる。リユークがもしアーシャに狩人^{シャスール}をやめさせようとしているのなら。胸騒ぎがした。

不意の客人がやってきたのは、召使いによって直接運ばれてくる夕飯を食べ終わった後のことだった。彼らは一様に押し黙っており、アーシャがここから出すように頼んでも、申し訳在りませんがそれはできません、リユーク様におっしゃってください、の一点張りで要領を得ない。

結局、何の成果も得られないままに、召使いはそそくさと部屋から逃げるように退出してしまった。

脱出方法について思案を巡らせていると、かたり、と窓が揺れる音がした。はっとして振り返ると、そこには見慣れた笑顔があつた。

「セシル殿！どうしてここに…」

それは数日ぶりにみる、相変わらず邪気のなさそうな司祭殿の姿だった。

「こんばんは、アーシャさん。このような夜中に、レディの部屋を訪れるのは失礼なのは、とも思ったのですが…」

慌てて窓の鍵を開けて、バルコニーから室内へとセシルを招き入れる。彼の白い長衣は心なしか泥のようなもので薄汚れていた。いつもは陶磁器のように滑らかで白い肌にも少し擦ったような傷があり、金色の髪は天然パーマがさらにあっちこちへと暴れていた。

「一体、どうやってここまで辿りついたんです？」

セシルはアーシャの視線で気づいたのか、慌てて身支度を整える。アーシャも手伝い、彼の長衣の砂を払った。

「壁伝いに」

「壁伝い？私の記憶では――、ここは三階だったような気がするのですが」

「頑張りました。一度手を滑らせた時は、つい神を恨みそうになりました」

あっけらかんと笑う姿は、とても命がけの冒険をすましてきた後のようには見えない。そのまるでこそ泥のような所業に、アーシャは感謝するのも忘れて呆れてしまいそうになった。

「そんなことよりも、アーシャさん、一体どうされたんですか？その様子だと、無事に吸血鬼の血に対抗できたんでしょう？なのに、なぜ教会に顔を出さないんですか」

セシルはそれを問いたくて仕方がなかったようで、切羽詰まったようにアーシャの両肩を掴む。アーシャは困惑して目を瞬かせた。

「待ってください。私には、状況が全くわからないんです……。兄は、私のことを何と説明しているんですか」

思えばおかしいことだらけだった。吸血鬼の犠牲者の監視は、教会が取り仕切るものだ。だから、アーシャは当然リユークが教会の指示を受けてアーシャの守りの騎士となっているものだと思うていた。しかし、それではそのあと、アーシャを監禁したところで、すぐに教会にばれてしまうだろう。

「知らない、と。その一点張りです。私にも、アーシャが吸血鬼に襲われたことは絶対に言うなどと言って……」

「兄さまは……、私が吸血鬼に襲われたことを、教会に報告していないのですか」

アーシャは青ざめた。教会への報告義務を怠ることは、教会への叛逆と取られかねない。よくて謹慎、悪ければ――審議会にかけられる。あの生真面目で、教会に絶対の忠誠を誓う兄のすることとは思えなかった。

「僕にも、リユーク殿が何を考えているのかさっぱりわかりません。カデル大司教殿も、アーシャさんのことを気にしておられるようでしたし……」

あ、とアーシャは声をあげそうになった。カデル大司教の鋭い目つきが脳裏に蘇る。近々、指令書がくるはずではなかっただろうか。

「アーシャさん、何か新しい任務があったのではないですか？ カデル大司教には、もしアーシャさんをみつけたら、必ず安息日の晩には西の大通りまでくるように伝えて欲しいとおっしゃってましたよ」
「ええ。そうです、重要な任務を任される予定でした」

安息日となると、明日だ。もう日が無い。アーシャは急いでセシルに自分の置かれている状況を説明する。

頭の良いセシルは驚きに目を見はりつつも、すぐに事態を飲み込んだようだった。

「わかりました。では、明日の晩に、僕がアーシャさんを迎えにきましょう」

「え？」

「今日逃げれば、明日までにリユークさんに見つかってしまつかも
しれません。幸い、明日の晩はリユークさんは屋敷に帰ってこない
はずです。見回りの当番が入っていますから」

アーシャは逡巡した。屋敷から逃げる。それは、リユークに背く
ということ。そう思うと胸が痛んだが、考えれば考えるほど、それ
しか手段はないように思えた。

「わかりました。セシル殿には迷惑をおかけしますが…。よろしく
お願いします」

「迷惑なんて。僕はアーシャさんを助けられることを、嬉しく思っ
ているんですから」

目映いばかりの笑顔が、今はアーシャの心の翳りを取り払ってく
れた。

鳥籠の中の鳥、あるいは3

リユークがアーシャの部屋を訪れたのは、翌日の朝だった。冬の柔らかな朝日は、室内に行き届かずまだ薄暗い。人の気配に驚いたのか、眠たげな鳥の声が、ふと途絶えた。

「何か、不自由はないか」

いつもと変わらない端正な立ち姿に、感情の伺えない落ち着いた声音。少しだけ顔色が悪いような気がしたのは気のせいだろうか。アーシャは急いでリユークに駆け寄った。

「兄さま、どうして、こんなことをするのです」

毅然と問いただすはずだった。けれど、兄が次にどう答えるのかを考えると、緊張に声が震えた。

アーシャが怖いのは、魔物でも吸血鬼でもないのだ。ただこの目の前の人が、怖い。大切だからこそ、拒否されることがたまらなく怖い。

「昨日はきちんと食事を食べなかったそうだな。出されたものはきちんと食べる。我が俤は感心しない」

リユークは顔色一つ変えずに、アーシャの言葉を無視した。アーシャは思わず彼の腕を掴む。お願いだから、こっちを見て欲しい。祈るような気持ちだった。

「なぜ、閉じ込めるようなことをするのですか？私が、そんなに目

障りなのですか？… 教えてください」

リユークは先ほどから目を合わそうとはしない。アーシャに一瞥もくれず、その視線の先はどこをみているのか。言葉を探すような少しの沈黙の後、リユークがゆっくりと口を開く。

「ああ。――目障りだよ。おまえの声も、その姿も。おまえが視界の端に入るだけで、苛々する」

アーシャは息をのんだ。

前々から、察していたことだ。けれど実際に、言葉にして言われたのは初めてだった。

掴んでいた手を離すと、リユークが向き直り、初めてアーシャの目をみた。相変わらず、何を考えているのかわからない、蒼い瞳。深くて、澄んでいて、それでいて切りつけるように鋭い。

昔はそれでも、自分にとっては優しく見守ってくれる視線だった。今はただ、心をずたずたに引き裂いていく。

嫌だ、と心が叫んでいた。これ以上、聞きたくなくて、耳を塞いで逃げ出したかった。けれど更に追い打ちがかかる。

「おまえがいると、仕事がかどらないんだ。わかるだろう？ おまえはラインフォール家の者じゃない。その姓を名乗れない。だから、^{シャスール}狩人になる必要も、資格もない」

どん、と胸を抉られたような痛みが突き抜けた。膝から力が抜けそうになって、アーシャは必死に堪える。今のアーシャに、差し伸べられる手はない。

ラインフォール家に引き取られた時、彼女に与えられた姓は、「イグラゼル」。『神の子』という意味のその姓は、名乗る姓を持たない孤児に与えられるものでしかなかった。

貴族ではないにしろ、多くの神官を排出してきた名家の姓を名乗れないことは、仕方がないと思っていた。そんな姓を気にする必要もないくらい、義理の両親は惜しめない愛情を注いでくれた。けれど、やはり自分はローンフォールの家の者ではないのだと。名乗る度に思い知らされるのも事実だった。

『おまえは、私の妹だ。だから、気にする必要はない』

そんな自分の翳りに気づいて、さりげなく気遣ってくれたのは、他ならぬリユークのはずだった。その言葉に、どれほど救われたか。けれど今、本人がその言葉を否定する。

おまえは、「要らない」のだと、そう言うて。

「…もういいだろう。私に迷惑をかけるな。きちんと食事をとれ」

離れた手を、再び伸ばす勇氣はアーシャになかった。いや、もうこの先ずっと、ないような気がした。

足音が離れていつて、ぱたんと扉のしまる音がした。それきりだった。

「アーシャさん。こっちですよ」

頼りない月の光が、ぼんやりと林の道を照らし出す。ローンフォールの屋敷は、閑静な住宅地の西の外れに位置しており、裏手は林になっていた。表の隅々まで整えられた庭とは異なり、林の奥の方はあまり人の手が加えられていない。このまま林を迂回してから、西の大通りに出る手はずになっている。アーシャは慎重に、かつ素早く歩を進めた。

セシルが前を歩き、アーシャを誘導する。その足さばきは、おっとりした普段の彼からは考えられないほど俊敏で、シャスール狩人としての彼の力が推し量られた。金色の髪が光を映して時折煌めくおかげで、見失うこともない。

二人は、とりあえず屋敷からの脱出に成功したのだった。

真夜中、約束通りに再び窓から姿を表したセシルは、珍しく黒いローブを身にまとっていた。目立たないようにと、アーシャにも揃いのローブを手渡した。準備が良い。

彼は行きましよう、とも、やはり残りますか、とも、言わなかった。ただ、アーシャに手を差し出し、アーシャもその手をとった。それが、答えだった。

「気になるんですか」

アーシャが時折後ろを振り返ることに気づいたのだろう。問う声は少し控えめで優しい。

「いいえ」

出た声は情けないほど弱々しくて、アーシャはぎゅっと唇を噛んだ。

彼女の背後にあるのはラインフォールの屋敷だ。彼女がずっと、両親とともに、両親が死んでからは兄とともに守ってきた。

その屋敷に、兄に、今背を向ける。

兄に背いたのは初めてで、自分が間違った選択をしたのではないかと怖くなる。本当は今からすぐにでも屋敷へ帰るべきなのではないか。じつとりと嫌な汗が背を伝った。

アーシャを拒絶した兄は、それでもアーシャの幸福を考えてくれていたのかもしれない。シャスール狩人をやめさせ、普通の娘としての人生を、

彼女に与えようとしてくれたのかもしれない。

優しい人のもとへ嫁ぎ、子供を育てて、家庭を築く。吸血鬼にも魔物にも関わらずに、毎日を慈しむ。その人生を、アーシャに否定する気はない。毎日を平穩にすごすことこそ、もっとも難しく尊い。あるいは、吸血鬼を殺すことよりも、よっぽど。

それでも、アーシャは、誰かを守る自分の腕が欲しかった。幼いあの日の自分に、何もできずただ震えて祈ることしかできなかった自分に、戻りたくはなかった。

だから、今は自分のできることを、してみるしかない。

「迷っているのなら…」

「いいえ。もう迷いません。——私は、^{シャスール}狩人ですから」

アーシャは己に言い聞かせるようにきっぱりと告げ、セシルの言葉を遮った。セシルはまだ何か言いたげな様子だったが、結局口をつぐみ、それ以上のことは言わなかった。

もう、アーシャは振り返らなかった。

賽は投げられた1

「アリシア！」

少年は息せききつて、走って行く。冷たい風が頬を叩いても気にしない。はやる気持ちが彼をせき立てる。

もう一度声を張り上げると、長い回廊の途中、箒を持って掃除をしている少女が手をとめた。

少女は振り返ると、微かに微笑んだ。本当に僅かだが、眼鏡越しの碧の瞳が柔らかい光を帯びる。出逢ったばかりの頃とは違って、今ならそれがわかった。

自分だけに見せてくれる、隙のある表情に、いつも少年はちょっぴり優越感を覚える。

「今日は、赤い薔薇が咲いたんだ」

どうしても誇らしげになる声を抑えきれず、ほら、と手に持った小さな赤い薔薇をかけた。世界中の華を集めたといわれる宮廷の庭から、今朝1番に手折ってきた。紅い花弁に一雫残った朝露が、陽の光をうけて水晶のように煌めく。少女は眩しそうに目を細めた。

「綺麗ですね」

「アリシアの黒い綺麗な髪に似合うと思って。庭師のおじさんに言ったら、特別に内緒で一本だけくれたんだ。つけてみて」

少女は髪止めを外すと、請われるままに、その薔薇を耳元に差した。

「やっぱり、アリシアは美人さんだね。碧の瞳も、まるで宝石みた

い」

素直な感嘆の声に、少女は困惑気味に少し首を傾げる。

「ルー。貴方はどこでそんな台詞を覚えてくるんですか」

少年——ルーはもどかしい気分になった。

この少し素っ気ないが根は優しい少女は、自分がどんなに美しいのかを知らないのだ。美しさを磨いて競っている宮廷の貴族の娘たちより、どんなに清廉で凜としているか、知らないのだ。

「本当にそう思っているから、そう言ってるんだよ？」

「ルーは将来、女の子泣かせの男の子になりそうですね」

むう、と頬を膨らませて拗ねてみせると、少女が苦笑した。

「妹さんの具合はどうですか」

少女が遠慮がちに、聞いた。それから、少し後悔したように唇を噛む。その躊躇いが、彼女の心優しさを現していた。だから、ルーは言葉を選ぶ。

「うん、相変わらずだよ。でも、もうすぐお金が溜まるんだ。そうしたら、街で一番腕の良いお医者さんに見てもらえるから」

「よかったですね」

少女は、ほっと安堵したように喜んでくれる。ルーも、ほっと安堵する。少女を心配させずにすんだことに。

「でも、なにかあったら相談してくださいね。私にできる限りのこ

とはしますから」

少女は真摯な瞳でルーを捉えて、しつかりとした口調でいった。ルーは胸がずきんと痛むのを感じながらも、胸の中にたまっているもやもやとしたものが、油断すると口から出てきそうになるのを抑えた。アリシアには、言えない。全てを知った彼女が、一体どのように思つかを考えたなら、恐ろしくてとても口には出せなかった。だから結局、笑って頷くにとどめる。

「アリシア」

そこへ、別の男の声がかかった。少女が途端にすつと無表情に戻る。

ルーは若干の敵意をこめて、背後から現れた男を睨みつけた。相変わらず、気配もなく現れて薄気味悪い。影からそのまま出て来たように存在感の薄い、ひよろりと背の高い狐目の男だ。アリシアの少し前から王宮にやってきて、庭師の仕事を手伝っている。今も、手に剪定鋏を持っていた。鋏が鈍く光るのがどこことなく不穏で、ルーの眉が自然と寄る。

「——キース。何か用ですか」

「ええ、少し急ぎ連絡したいことがあります」

ちら、とキースが少年に目をやる。少女は少し眉尻を下げて、男の意を汲んだ。

「ごめんなさい、ルー。ちょっと二人で話があります」

「わかったよ、アリシア。また明日ね！」

内心むつとしながらも、アリシアに次の約束をとりつけるのは忘

れずに、渋々とその場を離れる。

いつも少年を邪魔者のように扱うから、ルーはこの男が嫌いだ。けれど、アリシアがいつも心底申し訳なさそうに謝るので、ただをこねたりはできなかった。ルーは回廊を元来た方向に戻りながら、ちらり、と後ろを振り返った。二人はなにやら真剣な顔で話し込んでいるようだ。

少女の元へ、度々訪れる男。嫌いな理由は他にも沢山ある。毎回少女の元へ何か良くない知らせを持って来ているに違いない、と思っていた。せつかく見せてくれる僅かな、固い蕾がようやくほころぶような微笑みを台無しにしてしまうのは、いつもあの男だから。

自分にもっと力があれば、とルーは考える。自分が子供ではなく、もっと力のある大人だったなら、アリシアの相談にも乗れるだろうし、あの男から守ってやることもできるだろう。そして、たった一人の妹も守れただろう。

けれど、時間は待つてはくれない。ルーが大人になるよりも早く、その期限はやってくる。

『3日後だ』

脳裏に声が蘇った。決断しなくてはいけない。子供の自分にできるのは、ただそれだけだ。

賽は投げられた2

「キース殿、それでどうしました？」

ルーを見送ってからアーシャは向き直った。目の前の男——キースは、今は不本意ながらもアーシャと仕事上のパートナーだ。全く信頼などできないが、気配を消すことにかけてはこの男は完璧で、その点においては舌を巻く。

「指令ですよ、アリシア——いえ、アーシャ殿」

「その名前では呼ばないでください。誰が聞いているかわかりませんから」

アーシャは眉をひそめた。王宮の中では誰が耳をそばだてているかわからない。それが解らない男ではないはずなのに。あえて危険を冒して楽しむ、厄介な性癖が垣間見える。

キースは狐のような目をいつそう細めて軽く嗤った。そしてまじまじとアーシャを上から下まで眺める。

「大丈夫ですよ…今の貴方は、本当に別人だ」

確かに、とアーシャは思った。最初は鏡の中に映る自分の姿に驚いたものだ。

目立ちすぎる銀色の髪を黒に染めると、やはり印象はだいぶ違って見える。それに、黒縁の眼鏡は彼女の強いまなざしを押し隠すことに成功していた。今のアーシャを見て、アーシャだと解る者は親しい者だけだろう。

キースがすっと表情を消した。

「今度、国王陛下が宴を開きますね」

「ええ」

「そこで、頼みたいことがあります」

キースは大司教からの任務を、手短かに説明した。アーシャは黙って頷く。ついに、動くべき時がきたのだ。屋敷を出たのは、まだ息も凍るような冬だった。季節は変わり、今は野に一面花が咲き乱れている。王宮にも慣れ、勝手も解ってきた。

「ところで、あの少年と、仲がいいようですね」

「…本来の目的は忘れていません」

アーシャの声は頑なだった。ふ、とキースは口元を歪める。

「余計な情は、邪魔になるだけだと忠告しておきます」

「仕事の話はもう終わりですか。あまり話していても怪しまれるでしょう」

「おやおや。どうも私は貴方に嫌われているらしいですね」

アーシャは何も言わない。この男に何か言い返すだけ、無駄なのだと解っている。

「まだ、あります。どうやら、最近また『魂を売って』いるようです」

掌に、紙を押し込まれる。アーシャは眉をひそめた。

——またか。

「制裁を。…セシル殿と一緒にお願いしますね」

「わかりました」

低い声で返すと、キースは満足そうに頷いて去って行った。アイシャは掌の中の紙にさつと目を通すと、深い溜め息をついた。どつと、一気に疲れが押し寄せてくる気がした。

ルーは王宮からの帰り道、いつものように東の通りを抜けた。西とは違って、ここは騒々しく、野蛮な活気に満ち溢れている。

露店に並ぶ色とりどりの商品たち。運河を使ってやってくる商人たちが、遠い砂漠の向こうから運んで来た珍しいものばかりだ。砂埃にも負けない鮮烈な色使いに目を奪われる。

土の匂い、馬の匂い、汗の匂い。おいしそうな肉の匂いや芋のふかしたものの匂いも混ざりあつて、噓せ返るようだ。空っぽの胃には、よく沁みた。育ち盛りの身には、やはり一日一食は辛い。

王宮でつとめるといいことは、相場より少し高い給金以外にもある。昼に賄いが出るからだ。固く黒いパンと野菜の切れ端が入ったスープだけだったが、それでもルーにはありがたい。だからたとえ下働きでも、宮仕えの人気の高いのだ。誰もが王宮に勤められるわけではなかった。王族や貴族が生活する以上、身元の確かな者でなければならぬ。町医者やグードが紹介を引き受けてくれなければ、まずルーも無理だっただろう。

「へい、そこのお兄ちゃん。おいしい揚げ菓子はいかが」

お腹が空くばかりなので、あまり視界に入らないようにしていたが、ふと甘い香りにつられて見やると、細長いパンを揚げて砂糖をまぶしたものが目に入った。

家で待っているだろう、幼い妹——ミルティの顔が思い浮かぶ。

甘いものが好物で、嫌いなものは苦い薬。でも彼女は、その苦い薬を毎日飲まなくてはいけないのだ。おそらく、一生。だから、その分大好きな甘いものを食べさせてやりたかった。

最近仕事が忙しくてあまりかまってやれない。今日もミルティはちゃんと文句を言わずに薬を飲んだだろうか。

「おじさん、1本ちょうだい」

ルーはポケットから大事に一枚の銅貨を取り出すと、声をかけた。

今日は気分がいい。ルーは鼻歌歌いながら、船頭に礼を言い、小舟から飛び降りた。衝撃でがたん、と小舟が道の縁にあたって小気味良い音をたてる。手持ちの紙袋がさがさ鳴った。揚げ菓子が2個、仲良く並んで入っている。露店の店主は、今日娘が生まれたらしく、上機嫌で1個おまけをつけてくれたのだ。

ミルティは揚げ菓子が大好きだった。彼女が笑顔になるところを想像すると、それだけでルーの気分はふわふわしてくる。

ルーの家は、雑多な裏の水路を更に奥に入り、橋の下をくぐり抜けたところにある。薄暗くて、日の光もささないところ。水路の行き止まり、背の高い建物に囲まれて、空が四角い。

薄汚れた建物の間にはロープが橋渡しされて、ひらひらと洗濯物が風に靡いていた。ここは不気味なほど静かだ。けれど確かに、沢山並ぶ扉の向こうには人の気配が蠢いている。

「ただいま、ミルティ」

ルーは声を弾ませながら、ぎしぎしと悲鳴をあげる扉を引っ張った。

その瞬間、少し違和感を覚える。薄暗い。いつもなら、蠟燭の明かりがついているはずなのに。

「ミルティ？」

開けっ放しになっている扉の中をのぞく。ルーはすうつと自分の身体から血の気が引いて行くのがわかった。床の上に、割れたガラスのコップの欠片が散らばっていた。そして、その傍には、ルーと同じ赤茶色の髪の毛が扇のように広がっている。

「ミルティ！！！」

彼の血を分けたたった一人の妹が、青ざめた顔で倒れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385q/>

月の都

2011年2月4日05時02分発行